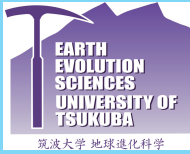


# 2014年度第14回



日時：12月3日(水)17:00～

場所：自然学系棟 B215

## 地質学セミナー

### 四国東部穴喰地域の安芸構造線

発表者：三橋 俊介 (地圏変遷科学分野 M1)

四万十帯は九州から四国を経て、関東山地にまで分布する付加体である(例えば、FX Passelegue et al., 2014 や Kano et al., 1990)。四国東部に広がる四万十帯は、その年代から白亜系の北帯と古第三系より若い南帯に分けられ、それらの境界線は安芸構造線と呼ばれている。四国東部は石田(1998)や君波ほか(1998)によって岩相および放射虫化石年代により層序区分が行われ、石田(1998)は北帯の日和佐累層、牟岐累層、南帯の海老ヶ池層、奈半利川累層に分けている。また、氏家ほか(2006)や山口ほか(2009)は海岸近辺の牟岐累層についての熱構造や流体の挙動について検討している。しかしながら、内陸では安芸構造線の位置の詳細は調べられていない。本研究では安芸構造線が通ると考えられる地域において層序・構造とともに古地温度構造から安芸構造線の位置を特定することを目的とした。

対象地域は高知県安芸市から東に35kmほどの広岡川を中心に南北に6km程度、東西に6km程度の範囲とした。調査地域に分布する構成岩は東西ないし北東-南西方向の走向で、基本的には北に中～高角度で傾斜し、北上位を示す。踏査の結果、これらは四つの層序単元に区分することが可能で、それらは石田(1998)と君波ほか(1998)の岩相区分(南帯の奈半利川累層と海老ヶ池累層、北帯の牟岐累層と日和佐累層)にほぼ対応すると考えられる。以下に各層の特徴を述べる。なお各層の堆積年代については石田(1998)と君波(1998)を引用した。

奈半利川累層：厚さ約3000m、剥離泥岩片を含む粗粒～中粒の厚層砂岩を主とし、砂岩勝ちの砂岩泥岩互層を挟む。堆積年代は始新世中期と考えられる。

海老ヶ池層：厚さ約100～200mであり、西側では薄くなっていく。細粒砂岩の小岩塊を含むメラングジュからなる。砂岩の淘汰はよく、雲母鉱物を多く含む。頁岩は暗緑色で劈開面がよく発達している。堆積年代は始新世後期～中新世最初期と考えられる。

牟岐累層：厚さ約2500m、淘汰の悪い砂岩の小岩塊を含むメラングジュからなる。砂岩には雲母鉱物をあまり含まない。頁岩は暗緑色で劈開面がよく発達している。堆積年代はカンパニアン後期と考えられる。

日和佐累層：厚さ約500m、中粒～細粒の砂岩が卓越する砂岩頁岩互層からなる。頁岩は黒色で劈開面は発達している。堆積年代はカンパニアンないしマストリヒチアン初期と考えられる。

今後の予定として、被熱温度を広域的に測定し、安芸構造線との関係を検討していく予定である。

### 次回のお知らせ

日時：12月10日17時00分～, 場所：総合研究棟 B110

発表者

大角 恒雄 (地球変動科学 M1)

山田 昌樹 (生物圏変遷科学 M1)

連絡先

池端 慶 (岩石学) ikkei@geol.tsukuba.ac.jp

遠藤 雄大 (岩石学 D1) tendo@geol.tsukuba.ac.jp